自己研さんを応援

自己啓発奨学生

「自己啓発奨学生」（出願制）は学術やスポーツなどの分野で優れた実績をあげた学生を奨励するために設けられた制度。

今年度は、第45回全日本学生囲碁十傑戦で2連覇を果たし、アジア大学生国際囲碁大会で日本人最高位の5位に入賞した花巻未生さん（経済3）、情報処理技術者試験テクニカルエンジニア（ネットワーク）試験に合格した春藤拓志さん（ネット情報3）、ILF U-19 World Lacrosse Championship 2008に出場し7位の好成績を収めた浅山文宏さん（法2）の3人に支給された。

春藤さん（左）に奨学金を手渡す嶋根克己学生部長と道家英穂同次長

浅山さん

花巻さん

花巻　未生さん（経済3）＝全日本学生囲碁十傑戦2連覇

春藤　拓志さん（ネット情報3）＝情報処理技術者試験合格

浅山　文宏さん（法　2）＝ラクロス世界大会で活躍

公認会計士試験に合格　17人に奨学金支給

指定試験奨学生（短答式を含む）

難関試験に合格した学生に奨学金を支給する「指定試験奨学生」への奨学金支給が3月10日行われた＝写真。

今年度の支給者は次のとおり（敬称略）。

▽公認会計士試験合格＝笠原由覚（経営4）、佐藤甲斐（商4）、阿部裕泰（商3）、岩瀬義幸（同）、橋本裕（同）、尾花透（同）

▽公認会計士試験短答式試験合格＝苅込将之（経済3）、伊東まりか（商4）、小澤寛之（同）、小泉誉幸（同）、廣瀬久美（同）、柳沼彰（同）、塚田純平（商3）、布施俊平（同）、本田翔（同）、六車明紘（同）、渡辺謙（同）

※学生部では2つの奨学生制度（出願制）に積極的にチャレンジしてほしいと呼びかけている。問い合わせは学生生活課まで。

英語教員になる！『夢』実現

今井　佳奈子さん（文4）

2008年4月にスタートした「教職大学院」は生活指導・クラス運営、マネジメントの仕事など学校で起こるさまざまな課題を解決する「スクールリーダー」の養成を目的とし、通常2年間のコース（現職教員は一部免除）で「教職修士」が授与される注目の専門職大学院だ。

「英語教員になる」という目標を抱いて入学した今井佳奈子さんは、田邉祐司ゼミで実力を磨き、難関の神奈川県高校英語教員採用試験と東京学芸大教職大学院に合格。神奈川県では教職大学院合格者に2年間採用猶予がある制度を利用し、4月から大学院で学ぶ。

「田邉先生の『通訳入門』の授業を受け、魅力に引き込まれ、『目標を達成するにはこの先生しかない』と思い相談に行ったのです。先生から、いまやらなければならないこと、採用試験までにやっておくべきことを具体的に教えていただきました。ゼミに入ってからは志の高い仲間と切磋琢磨し、勉強を歯磨きや食事と同じように生活の中に取り込んできました」。通学には持ち歩き、通学時間などの「隙間時間」も学習スケジュールに組み込み、無駄にしなかった。「辞書を旅する」田邉教授の教えで辞書には付箋がびっしりだ。

採用試験と教職大学院

難関突破しダブル合格

高大連携校の県立ひばりが丘高校で半年間、教科研修生として授業研究に励んだ経験や、塾講師のアルバイトで、生徒が分からないことが分かったときの喜びの表情を見て、人の成長にかかわれる「教師」への思いがますます強まったという。県の採用試験は、246人中48人合格という狭き門だった。

「『教師になりたい』思いは誰にも負けなかったと思います。その気持ちが面接官に通じたのでは」と試験を振り返る。「大学院では教育学を中心に学ぶので、英語のスキルアップはこれまで以上に自分の責任になってきます。田邉先生のように、生徒の目線にたって教えられる教師を目指します」と瞳を輝かせた。

ネット情報・栗芝プロジェクト

千代田区観光協会に協力

応援フラッグ作成システムを東京マラソンEXPOで披露

3月19日から21日まで東京ビッグサイトで開催された「東京マラソンEXPO」には、コースとなる自治体のプロモーションブースなどが出展し、「東京マラソン」を盛り上げた。千代田区観光協会に協力したネットワーク情報学部・栗芝正臣プロジェクトの学生は、顔写真入りの応援フラッグを簡単に自分で作るシステムを開発し、同区のブースは外国人ランナーに大人気となった＝写真。

同プロジェクトは、27日からのさくら祭りにも協力し、北の丸公園入口前近くのブースで08年度「千代田学」に採択された研究成果となる秋葉原の観光ガイドマップを配布する。

サテライトキャンパスで研究成果を発表

「Pac Pac Project」チーム

ネットワーク情報学部3年次生の「Pac Pac Project」チーム（指導教員：上平崇仁准教授）が、2月8日、新たな知の発信拠点として1月にオープンしたサテライトキャンパスで、親子間のコミュニケーションをテーマとした体験型の研究発表を行った。

この研究は、同学部の授業科目『プロジェクト』の一環として取り組み、AR技術を利用して、親子で一緒に遊ぶための体験型のゲームを開発した。お互いの見ていることの違いを浮かび上がらせる簡単なゲームの仕掛けと、ゲームを終えたあと、絵本によるふりかえりを行うことで、親子の会話につながるストーリー性をもっている。これら一連の経験を通して、相互理解を促し、より豊かなコミュニケーションの契機となることを狙って作られた。当日は、開発の過程で貴重なデータ提供をいただいた三田子ども文化センターや枡形子ども文化センターなどの親子が来訪。実際に装置を体験し、ゲームを通してコミュニケーションを深めた＝写真。

長沢ひろば で 経済・徳田ゼミ生が『餅つき大会』

地域経済を学ぶ経済学部の徳田賢二ゼミ生12人が、地域の活性化と住民との交流を目的に、長沢商店会（川崎市多摩区南生田）の交流スペース「長沢ひろば」を利用し2月15日、餅つき大会を行った＝写真。

キャリアデザインセンターの課題解決型インターンシップの課題として、昨年7月に納涼盆踊り大会を、11月にはハロウィーンのイベントとして仮装喫茶店を開くなど、地域住民と交流を図ってきた。

第3弾となる今回は、地元の南生田中学から杵（きね）と臼を借用。約40キロの餅米を、子供たちとついたり、ゼミ生が持ち寄ったおもちゃで一緒に遊んだりして交流した。つきたての餅は、1パック2個入りで販売。マイはしやマイ容器を持参した方にはさらに1個サービスして、「エコ」についての関心も高めたイベントは大盛況だった。

リーダーを務めた岡本祐輝さん（2年次）は、「今後もさまざまな世代が楽しめる企画を展開し、地域交流の拠点となればうれしい」と話した。

New Ground　新しい見方 ㉜

佐藤　宏紀　（法２・ジャーナリズム研究会）

「歩　み」

すべてが自己責任の社会人としてひとり立ちする卒業生の心情はどのようなものだろうか。卒業まで２年ほどある筆者には想像もつかないが、きっと不安でいっぱいなはずである。「とにかく頑張れ。不安に負けるな」と口では簡単に言えるが、実際にこれを行動に移せる人はほとんどいない。不安に負けず歩みだすにはさまざまな方法があるが、立ち止まり、あえて後ろを振り返るというのはどうだろう。

大学生に戻ることはできないが、４年間を過ごした〝場所〟にはいつでも戻ってくることが可能だ。なぜ大学に通っていたのか。入学時に持っていた将来の夢は何なのか。在学中の志を思い出すためにＯＢ・ＯＧとして大学を見つめ、自分を奮い立たせるのである。また、４年間共に通い続けた友人たちと会うのもいいだろう。

人は入学や卒業などで変わり続け、キャンパスは新しい施設が建ち風景も変わってしまうかもしれない。だが、学んだことや、友人たちと笑い合った思い出は消えることがない。

▲　仲間と過ごした思い出はいつまでも…（卒業式を終えて）

振り返れる場所や思い出から遠ざかることは確かに悲しいことだが、それだけ自分が歩んできたという証明である。卒業というゴールをスタートにかえて、新たな一歩を踏み出してほしい。

ご卒業おめでとうございます。